

子宮移植の計画承認

慶応大実施なら国内初

慶応大は27日、子宮がで承認されたと発表しない女性が出産できるようになった。生まれつき子宮がないようにするために第三者の「ロキタンスキー症候群」の患者や手術により子宮を移植する臨床研究の実施計画が審査委員会

子宮を摘出した患者が対

象。子宮移植が実施されれば、国内初となる。計画では20〜30代の3

人程度に実施予定。あらかじめ患者の卵子を採取し、体外受精させた夫婦の受精卵を凍結保存する。子宮移植後に受精卵を子宮に入れ、妊娠、出産を試みる。子宮の提供者は母親ら親族を想定している。

チームの木須伊織専任講師は「子供を授けられない患者の選択肢が広がる

という意味では期待できる技術。多くの課題もあるので体制整備をしながら慎重に進めたい」と話した。現時点で手術を実施するかどうかは決まっておらず、今後検討を進めるとしている。

がん治療などで子宮を失った女性の出産にも道を開くと期待される一方、出産のために健康な提供者の身体にメスを入れることについて倫理的課題が指摘されている。

計画を進めるに当たりチームは、日本産科婦人科学会など関係学会に見解を求め、日本医学会が令和3年、ロキタンスキー症候群の患者の診断や治療などの支援体制を関係学会が整えることなどを条件に、計画を承認する報告書を出した。これを受けチームは4年11月に国の認定を受けた大学の審査委員会に実施計画を提出した。